

---

# 真空管

社 九生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真空管

### 【Nコード】

N6417K

### 【作者名】

社 九生

### 【あらすじ】

- 僕はどこにいたのだろうか。

事故で脳性まひを患い、全身不随となった一人の青年。

治療を施してくれる医師、献身的な介護をしてくれる母親、過去にいた恋人、そして今の、ベッド上で横たわっているだけの自分。

彼が存在できる場所は、もう自分の頭の中しかなかった。

真空管。

記憶の場所へと不規則に繋がる漆黒のトンネルを、彼は彷徨い続ける。

地下鉄の駅のベンチに、僕は座っている。

駅名が記されている筈の看板は空白で、僕以外に人はいない。電車が来る気配もない。

全ての電光掲示板は電源が入っていないのか無表示のままだ。いくつかある白い蛍光灯の一つが明滅を繰り返している。

尽きかけた電球の「ジィイ……」という音が、静寂の中に虚しくこだましている。

いつから僕は、この青い4人掛けベンチの一つにこうして座っているのだろう。そして何を待っているのだろう。

心はひどく空っぽだ。この閉塞感に満ちた地下鉄の空虚さと同じくらいに何も無い。

あの明滅を繰り返していた蛍光灯が、ついに消えた。その下のエリアに薄い暗闇が生じる。

その隣の蛍光灯も唐突に消えた。僕の頭上を照らす蛍光灯も消え、ホームの端から端までの蛍光灯が全部消えた。光が完全に消え去った。掌を両目すれすれに近づけても、額に鈍い感触があるだけで、僕の掌は見えなかった。

この地下鉄のホームは完全な暗黒空間と化したのだ。しかし不思議と恐怖はなかった。

僕はおもむろに立ちあがって、暗闇の中をゆっくりと歩き始めた。とりあえずそれなりの注意を払って、線路へと降り立ってみる。あとは足の裏にレールの存在を感じながら歩を進めていく。

別に出口を目指して歩いている訳じゃない。いや、恐らくそんなものはないのだろう。

この暗闇は果てる事なくどこまでも続いている。

そんな予感を胸に抱きながら、僕は無為に足を動かしていく。

視界はほぼ暗闇と同化しきっていた。

歩を進めていくにつれて、徐々に手足の感覚がなくなっていく。僕の意識が暗闇に浮遊している。そんな感じだった。

自分は前後どちらを歩いているのか、というより、そもそも歩いているのかさえ曖昧だった。僕の存在を明確に定義してくれているのは、レールを踏んだ際に生じる金属音ぐらいだ。しかしその音も、「自分が踏んで鳴らしている」というよりは、足元で鳴っているにも関わらず、どこか遠くで誰かが断続的に鳴らしている音のように聞こえる。つまり、僕はちゃんとここに存在しているのか、分からないのだ。隣に誰かがいてくれて、たとえその姿が見えないのだとしても、僕の名前を呼んで語らってくれたのなら、僕は「ここにいるんだ」という安心感を得るだろう。だが、それも当然ない。

あったかもしれない、そんな可能性さえも、僕は僕自身の手で摘み取ってしまったのだ。

ある時、僕はとある病院の一室にいた。主治医と何人かの医師らが、ベッドに仰向きでいる患者にいくつか質問している。

「私の指が何本分かるかね。」

医師の指は人差し指、中指、薬指と、3本立っていた。

対する患者の男は、まるで高齢犬のようにだらしなく口から舌を出し、医師の指を見る目も焦点が合ってなく虚ろだった。

「何本か分かったのなら、何か合図をくれないか。」

男は医師の言葉に明確な反応を示す事はなく、「ハア、ハア」と大きく息を切らせるばかりだった。

彼は脳性麻痺を患っているのだ。

身体の自由が利かず、寝返りを打つのはおろか、ちょっと首を横に傾げるにも人の手を借りないとままならない。

言うなれば、植物人間だ。

「……何も反応はない、か。無理もないな。」

質問をした医師が、指をたたんで溜息を吐くように言った。

男は変わらず「ハア、ハア、ハア、ハア」と荒々しく息を吐き出している。

「家族にはどう伝える？ はっきり言うのか、回復の見込みはないと。」

もう一人の医師が彼に尋ねた。

「……もうしばらく様子を見たい。だが、近いうちに、伝えるよ。」  
そう答えた医師の顔は暗かった。

「ハア、ハア、ハア。」男は去つていく医師達の背中に息を吐き出し続けている。

「呼吸が苦しいですか？ マスクを……。」

看護婦が男の口に酸素マスクを取り付けた。

エメラルドグリーンのカバーが一気に白く曇る。

看護婦は別の作業に移ったが、よく男を見てみると、カバーが白く曇るのには規則性があるのが窺えた。どれも三回白く曇っては、数十秒の間を置いた後にまた三回白く曇っている。この男は「ハア、ハア、ハア」と三回だけ大きく息を吐き出しているのだ。それが何を意味しているのか。先程の医師の質問……、「指は何本立っているか」

三本だった。そしてこの男が息を大きく吐き出す回数も同じく三回。つまり、男はあの医師の質問に答えていたのだ。声を発する事が出来ない代わりに、息を吐き出す事によって。

この作業は目が見えている事と、本人に確かな意識がなければ成立しない。この男の身体は完全な植物状態だが、脳の意識を司る部分は生きていて、男の自我を明瞭に保っている。

しかし、医師達は気付かなかった。男の声なき声の存在を。その意識が活発に働いている事を。

ただ男は声に、表情に、動作に、他人に自分を伝える術がないだけなのだ。

この哀れな男は一体だれか。そう、僕だ。僕自身だ。

髪は開頭手術の際に全て丸刈りにされている。それは包帯によってさほど目立ちはしていないが、大きく開かれた両目と、痙攣を起こした顔面の筋肉によって、ひどく歪んだ表情になっている。それは以前鏡で見た「僕」の顔とは似ても似つかなかった。

お前は誰だ、誰なんだよ。本当に僕なのか？

男に尋ねたが、何の反応もなかった。息を吐き出す事もしなかった。そもそも僕の声なんて、この世界にいる人間の誰にも届かない。僕はこの世界に干渉する事は絶対に出来ないのだ。

ただ、与えられるだけ、見ているだけ、考えるだけ。それ以外に僕が出来る事は何もない。

かかしに魂があるのなら、きつと、こんな気持ちなのだろう。

いつの間にか、僕の視界は元の暗闇の中にあった。そうか、あれが僕なんだっけ。

しばし呆然として、足を止める。

僕はいつしか肉体と精神が剥離してしまったのだ。あんな生活を送っている内に、僕が四肢を動かして生きられる世界は、自ずと「記憶」の中に限られていった。この暗闇は不規則にそれらへ繋がるトンネルだと思えばいいだろう。だから、出口などどこにもないのだ。

強烈な孤独感が胸を襲った瞬間に、僕の右手に温かな感触があった。これは誰かの手だ。

そう思った途端に、視界は繁華街の雑踏の中へと移っていた。

「ね、私、行きたいところがあるの。」

僕のような誰かの隣には、天真爛漫な笑みを浮かべる綺麗な女性の姿があった。

二人は手を繋いで、人ごみの中を歩いて行った。

「これ、可愛くない？」とウィンドウショッピングを楽しんだり、

「ちょっとお腹が空いたね」とテラスのある洒落た喫茶店で一服したり、

「……いま、あの綺麗な女の人を見てたでしょ。もう。」

「い、いや、君しか見てないよ。」

「本当に？」

二人はどこにでもいる、幸せなカップルだった。

二人がデートを終える頃には、すっかり夜も更けていた。

その夜は一人ぐらしの彼女のアパートで明かす事になった。

おもむろに口付けを交す。目の水晶が交差する。暗い部屋に窓か

ら月明かりが差し込んで、二人の営みが夜空の片隅に密かに映える。

「……君がどこかに消えてしまうのが、たまらなく怖いんだ。」

行為をし終え、二人は薄手の掛け布団に裸の身を寄せ合っていた。

「私が消えると思っっているの？　なんで？」

男の右胸に頭を置いた彼女は、上目づかいにそう尋ねる。

「分からない。分からないから、不安なんだ。」

男は真剣な顔つきで言った。彼女はそれに短く目をつぶって、ク

スッと笑って再び目を開くと、

「……私は、どこにも行かないよ。」

男はその耳馴染みの良い清らかな声に、

「なら、いいんだ。」

とだけ、淡泊な声で答えた。

二人は揃って目を閉じ、そのまま眠った。

意識はまたあの男の病室にあつた。男の母親らしき中年女が、サイドボードにある花瓶の花を移し替えたり、男に林檎を剥いてあげたり、看護婦並みにせわしく病室内を動いている。その姿は、植物状態になってしまった息子に何かしてあげなくては、そんな母親としての使命感に満ちているのが窺えた。

そして随分と心労を重ねたのだろう。おばさんにありがちな厚化粧に隠れてはいるが、額や頬、所々に深い皺が刻まれている。

男の方はというと、いつものように舌をのみ込んでしまわぬよう、



上半身をやや起こされた状態で寝かされ、母親の献身的な介護を受けている。まあ、この病室では珍しくもない日常的な光景だ。

しかしその日常的な光景が、母親の絶叫と共に粉々に壊れていくのは、もうあと数十分後の事だ。

「……北警察署の者ですがね。裕也さんは、いらつしやいますか？」  
褐色のトレンチコートを着た長身の強面の男が、素早い動作で警察手帳を示しては内ポケットにしまつと、ずかずか病室に入ってきた。

個室であつたために、他の患者にその急な来訪者の存在が知られる事はないが、突然の出来事に母親は面食らっていた。

「え、む、息子に何か用で？」

かなり動揺しているのか、母親の声は裏返っていた。

「最近テレビでご存じないですか？ 世田谷の方で起きた20代女性の不審死。あなたはお母さんですね？ この事件で、おたくの息子さんが事件に関与している可能性があるんです」

初めにずかずかと病室に入ってきた時の強引さよろしく、話しをする口は早く、相手を威圧するかのような声質だった。

おっとりとした性格の母親は、この刑事の口の早さに頭が追いついていかず、暫くぼかんとしていた。

「つまり、刑事さんは息子を……？」

「ええ。任意ではありませんが、単刀直入に申せば、息子さんに取り調べをしたい所存です」

男の細長い目がキラリとベッドに横たわる男に向けられる。母親の頭はもう錯乱状態に近く、どうにか目前の現実にしがみつこうと両目を大きく開いて刑事の顔を見つめている。

「し、しかし、息子はこういった状態で、取調べなんてとても」

「事前に伺つてはいたんですがね。もし少しでも話が出来る状態なら、と我々も考えていたんですが……」

刑事の冷徹な視線が再びベッド上の男に向けられた。

そして数秒間まじまじと見つめたあと、刑事はこれまでより低い

声で、

「……お母さん、ちょっと署の方までご同行願えますか？ 2 / 3  
見てもらいたいものがありますのでね。無論、任意ですが」

刑事はそうは言いつつも、雰囲気は殆ど脅迫に近かった。

母親はただ強面刑事の迫力に圧倒され、

「は、はい……。分かりました。」

と力なく答えるしかなかった。

僕はまた暗闇を歩いている。

意識が浮遊している、という感じはしていない。何故なら視界が完全な暗闇ではなくなっているからだ。

橙に近い色をした常夜灯が、何十メートルかおきに並んでいる。

その常夜灯の下の半径5メートルぐらいの円はぼんやりと明るく、四方を覆う深い闇の中にあるのが不自然なぐらい、暖かな光だった。良く洋画で見えるような、おじいちゃんの家にある暖炉の火の色だ。しかし光に温度はない。この漆黑と同じで、ひたすらに冷たい。

僕は何本もの常夜灯を、いつしか感じた暖かさに想いを馳せつつ、静寂に小さな足音を連ねていった。

ある時の常夜灯を通り過ぎた時、もう前方に明りは見えなかった。視界が再び暗黒と化していく。それでも足を前に動かして歩いていくと、今度は急に常夜灯の光の円の中に僕の身体が浮かんだ。光量はさほどない筈だが、暗闇から急に光の中に出たことで目が眩んだ。

目を慣らしてゆっくり瞼を開けると、目前に覚えのある男の背中があった。彼はがっくりと膝を曲げて地に座り込んでいて、それは何か信じられない光景を前に打ちひしがれているかのようだった。彼が一点に見つめているもの。

僕は彼の頭越しに覗きこんだ。するとそこには、血だまりに横たわる誰かの姿があった。

身体の上から半分は光の円の外に出てしまっただけで見えませんが、白い

レース地のワンピースからすらりとした両足が伸びているのを見ると、女性らしい。

血はゆっくりと流れて溜まりの幅を徐々に広げ、女性の綺麗な足の爪先まで達しようとしていた。男はそれを前に強い放心状態である。

「殺したんだな、お前が」

僕は男の背中に向かって喋っていた。

「その女性は、僕の恋人だったんだ。世界で一番好きだったんだ」  
男は一向に振り返る気配を見せない。

「怖かったからか？ 裏切られるのが怖かったんだ。彼女がどこかへ行くのが怖かったんだ。消えていくのが怖かったんだ。違つか？」  
僕はいよいよ男の後ろ首の襟をつかんで無理やりに引き起こした。そして反転させ、胸ぐらをグッと掴み男の顔と向き合った。その目にはもう何も、生きている人間らしい光はなく、ひたすら虚ろだった。

「どうして殺したんだよ。どうして奪ったんだ。彼女は裏切ろうとなんてしなかったじゃないか。どこにも行かないって約束したじゃないか。言え言え言え言え言え言え言え言え言え言え言え！」  
絶叫に近い声を出したその瞬間、僕の目前には彼女の死体があった。

今まで胸ぐらを掴んでいた男と同じ位置に、僕はいた。

右手にはさつきまでなかった筈の、刃の先に鮮血を湛えた包丁が握られていた。

「僕が彼女を殺したんだ」

ハッと気付かせられた。ただ茫然とした。溶けていく視界に、愛した彼女の血が、その綺麗な足の線に沿って緩やかに流れる。こんなに音もなく、ただ強烈な色彩でもって、光の円を朱に染めてい

く。

「殺したんだな、お前が」

僕の声が背後から聞こえた。また別の僕がやってきたのだ。

一体、僕はどこにいるのだろうか。ここに存在しているのか。浮遊しているだけじゃないのか。あの血だまりに沈む、彼女の屍の前を、ただ永遠と。

常夜灯の下をまた歩いていく。

前方には等間隔に何本もの常夜灯が、果てる事なく一列に続いている。

伏し目だった顔をふと上げると、常夜灯の近くに標識があった。

そこには白い文字で「福岡」と書かれていた。到着目安になる距離は書かれていなく、ただ地名だけだった。どうしてこんな物がここにあるのか……。

また何気なく周囲を見渡す。すると、どこからともなく車の疾走音が聞こえた。トラックだろうか。独特のエンジン音が近づいてくる。30M……、20M……、トラックに減速する気配はない。そしてトラックのハザードランプに僕の目が眩んだ次の瞬間、そこに立っていた僕の身体は大きく吹き飛ばされた。

トラックはやっど停止し、運転席から慌ててドライバーが飛び出してきた。ドライバーの向かった先には、さっきまでの僕が、血だまりの中うつ伏せに横たわっていた。微動だにもしない。目撃者のいない夜の峠だ。ドライバーはそのまま逃げる……、かと思いきや、携帯電話で救急車を呼び、運転席にあったあり合わせの物で応急処置を始めた。

「おい、なんて事をしているんだよ。逃げろよ。逃げればいいんだよ。偽善者」

僕がどうして東京の世田谷から、福岡のしかも峠道を歩いていたのかは記憶に浅い。ただあまりに救いようのない現実から一步でもその中心地から一步でも離れていた願望に支配されていたのだと思う。そして肉体の限界まで歩いたところで？死？を望んだのだ。

囚人の病室は至って無機質だ。

原材料がむき出しの灰色の壁、白い電球があるだけの天井。

僕はこの外世界から隔離された冷たい部屋の中で、生命を維持するのに最低限な設備、施しが与えられるのみの、廃人同然の日々をベッドの上で送っている。

僕はモザイクのように無数にひび割れた天井を見ていて気付いた。

自分は、どこにも存在していない。

ただ？僕？という一人称が、他人から与えられた言葉でもって、無慈悲に流れる時間の中に浮かんでいるに過ぎない。

だから世界や他人は、目の前で生きているのではなく、頭の中で生きているのだ。

しかし？世界？という、物質的な輪郭を持った次元に生きていられる時期がある。風

や音や光、誰かの体温や、自分の名前を呼ぶ声、それらが自分の身を包んでくれている時だ。ごく当たり前の事過ぎて分からなかった。いや、隠されていただけだ。逃避していたとすら言えるかもしれない。つまり、第三者的なファクターによって、自己の存在の真理はあやふやにされてきたのだ。だが、分かった。

今の僕は、もうどこにも存在していない。

あやふやにされたまままでいたかった。真理になんて到達したくな

かった。僕は誰かの認知によって生きていたい。存在していたい。母親はもうやってこない。父親はとうの昔に亡くなってしまった。そして彼女は……、僕が殺してしまった。

記憶を廻ろう。記憶の暗闇の中をどこまでも歩き続けよう。もうそこできしきられなくなってしまうた。

心電図は生体反応を示し続ける。が、身体はもう1ミリだって自分の意思で動かせない。

もしそれが叶ってこの部屋から出られたとして、殺人者の未来に待つのはどの道、24時間ずっと灰色の天井を仰いでいるのと同じような、身動きのとれないまま迎える空虚な破滅だけだ。

瞼が重くなってきた。ようやく、今日のところも眠れる。夢の中でならどこへでも行けるのだ。地獄にも、天国にも、どこへでも。

暗闇の中を歩き続ける。気がつけばあの常夜灯もなくなっていた。思考がどんどん鈍くなっていくのを感じる。視界は闇に埋もれ、手足の感覚がなくなっても、そこにはまだ「自我」が存在していた。しかし今度のはもう……。

僕はとうとう、この闇の一部分になっていくらしい。それはどういう事なのだろうか。僕が僕でなくなるのか。

蝋燭は火が消えた瞬間を自分では知らない。気がつけば僕という存在も、別の何かにすり替わっている。この闇だってその連鎖の果てにここにこうして巢食っているのかもしれない。

僕が望んだ物はなんだったっけ。この世はとも生き辛かったんだ。僕のような、ひ弱で、精神的に脆い人間は、たとい他人がどんなに羨むような幸せだって、自信を持って肯定出来ないのだ。自分よりも相応しい人間がいる、自分のような歪んだ人間には相応しくない……、そう内罰的な思い込みによって自身をひたすら幸せから遠ざけようとする。だけど、幸せになりたい。なりたかったんだ。

「君かい？」

右手に温かい感触があった。誰かの手だ。その姿は深い闇によって見えないが、この感触や、息遣いや、空気感は……、とても懐かしい。

「あなたにとつて、自分の存在がどうか、幸せがどうか、本当はどうでもいいんですよ。ただあなたは、一人ぼっちがたまらなく寂しかっただけ。怖かっただけ。それをすり替えちゃだめよ」

聞きたかった彼女の声だ。

深い漆黒の壁を隔て、彼女は目前にいるのだ。

そう気付いた瞬間に、心に溜まった負の何もが透明な青色へと澄み渡っていく気がした。

そしてはるか前方に、光の扉が見えた……。

「君はもう、どこにも行かないね。そして僕を裏切らない……。

だって君は、僕を愛するために生まれたんだから。僕も同じさ」  
壁の向こうで彼女が微笑んだ気がした。ギョッ、と手を握り返される。

「急ごう。早く、君の姿を見たいんだ。」

僕たちは光の扉に向かって歩いていく。

手を繋いで。

その姿がたとえ見えなくても、残像でも、贗造でも、僕と彼女は愛し合うのだ。

(後書き)

ネット初投下の作品がこれです。

今になって見返してみると色々赤面……。

大幅な修正はしておりませんが、一つだった三点リーダーを二つにし、無駄な改行を減らすなど修正しました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6417k/>

---

真空管

2011年7月13日03時42分発行